

4. ブルー（海）・グリーン（草原）ツーリズムによる環境教育と新しい産業の創出

熊本県の豊かな自然を活用した自然に優しいブルー（海）・グリーン（草原）ツーリズムによる新しい産業の創出による地域の活性化も重要な課題となっており、阿蘇（グリーン）や水俣（ブルー）を対象に地域連携活動をベースに展開しました。熊本大学の法学部の教官・院生・学生の協力の下、地域の住民・NPOや行政組織などと連携して、特に、環境保全とアメニティ資源活用で雇用・所得創出に結実するツーリズム／ライフスタイル産業の育成を目標に実施しました。

第26回国立大学院環境科学関係研究科長会議で、滝川教授が特別講演

全国の15国立大学の大学院環境科学関係研究科の科長会議が、本年7月25日（金）に熊本市内で開催されました。その会議場で、滝川が熊本大学を代表して講演を行いました。演題は「有明海の異変と再生への道」（1時間）で、有明海に関する最新の研究成果と研究体制について紹介され、本沿岸域センターの高い研究ポテンシャルが全国にアピールされた講演でした。

干潟の熱収支の観測塔を設置しました

滝川は、研究の一つとして、有明海干潟域における、大気・海水・陸面（地中）間の物質・熱エネルギーの輸送過程を解明することを目的に、2003年3月、熊本港北側の干潟域に観測用鉄塔（有明海干潟環境観測塔）を設置し、気象・水質などの観測を進めています。観測塔の高さは10mで、地上から高さ5.6mの位置に作業用の足場を設け、観測用電源・データ回収装置などの機材などの収納庫を設置しています。測定項目は、風向風速・気温・湿度・気圧・降水量・日射量などの気象要素、塩分濃度・水温・溶存酸素などの水質、水位、地表面（水面）・地中温度などの土壌物理特性など多岐にわたります。回収されたこれらの観測データは、干潟特有の物質・熱移動過程の解明や、干潟の物理的環境の将来予測を行うための基礎データとしての役割を担うものと期待されます。



タイラギの死滅と養殖技術（特許出願中）の確立

タイラギは、浅海から干潟の砂泥底に生息する二枚貝で、貝柱は高級食材として重宝されています。しかし、有明海では減少傾向にあり、ここ20年間の漁獲量はピーク時でも最盛期の約20%に過ぎません。さらに、長崎県では1993年より、佐賀・福岡・熊本県では1999年より、連続してタイラギの大量死が起き、漁民は休漁を余儀なくされています。



タイラギの垂下養殖。写真のような容器にタイラギを入れ、養殖筏などに吊るして育てた。

逸見はタイラギを海面下に垂下して養殖すると自然状態より貝柱の成長がよいことを発見し、この度、養殖技術に関する特許を申請しました。まだ、長期間の養殖は不可能ですが、今後、有明海における資源の回復を目標に、タイラギの完全養殖を目指したいと思います。



養殖後のタイラギ。海面下に垂下したもの（左）と海底に地植えたもの（右）。垂下養殖は付着物が多く、殻の成長は悪いが、貝柱の成長はよかった。